G田海軍航空隊

タゴサク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｇ田海軍航空隊

【Ｎコード】
Ｎ９３０３Ｙ

【作者名】
タゴサク

【あらすじ】
オレは・・。
確か死んだハズでは？
オレは田中実と言う人間だった。
何故・・Ｇ田になってるのだ？

オレはGだ。（前書き）

オレは・・・。
確か死んだハズでは？
オレは田中実と言う人間だった。
何故・・G田になってるのだ？

オレはGだ。

オレは・・・。

確か死んだハズでは？

オレは田中実と言う人間だった。
趣味は戦記モノを読む事。
最近は減ったが異世界乱入モノも大好きだった。
そんなオレが仕事帰りに一杯飲って、フラフラと歩いてたら・・・。

目の前にダンプが・・・・・・。

「アッ、オレ、オワタ・・。」

そう思って当然だろう。
身体に強い衝撃を感じたのが田中実としての最後だったろう。
そのオレがどうして・・・。

「G田、総員起こしだぞ。タラタラしてたら指導教官に殴られるぞ。」

G田実となってたのだ。

ここは広島の田舎にある海軍兵学校。
オレはその中の海兵５２期生徒として、ここに在籍してる。
同期の柴田武雄も今は仲が良い。今は・・だがな。
未来では彼とオレは対立してしまうのだ。
このG田と言う男は某４３航空隊を指揮したり派手な経歴ばかり目立つが、

実態は「航空素人」だ。

少なくともオレはそう思ってる。

あの零戦が最後までコキ使われる原因となったのも、
コイツみたいな無能が中枢を占めてたからだ。

零戦の設計時にも散々な事をしてくれ、
おかげで大戦末期には特攻爆弾となってしまったのもコイツが悪い。

少なくともオレはそう思ってる。

大体未来の航空機がマッハとなるのも想像出来ない人間だもんな。

余談だが、戦時中最高の艦載機はオレはグラマンＦ４Ｆだと考えてる。
小さい飛行機だが凡庸性も高く、簡易空母でも運用可能。
そしてコンパクトに畳めるあの翼。
アレがあれば・・・・。
急増空母でも簡単に運用出来、対潜哨戒でも大活躍しただろう。

さて、もうすぐ我々はこの兵学校を卒業し、遠洋航海に出る事になってる。
後年、柴田と揉めないためにも彼とは親友になっておかないとな。
何せ数々のエースが彼を信頼してたのは有名な話だ。
Ｇ田は某４３航空隊のみだし・・。

「柴田、オレはこの航海が終わったら航空の道へ進もうと考えてるのだ。」

「Ｇ田、お前もか？
オレも航空隊に入るつもりだ。」

「オレは戦闘機部隊に入りたいと思う。
未来は絶対に戦闘機が軍隊の先端となるからな。」

「どうしてだ？」

「考えても見ろ。
今の飛行機は誕生して二十年も経っていないのに、既に戦争兵器として大活躍してる。
特に戦闘機の性能向上は予想も出来ない程だ。
今はグルグル回るだけの格闘戦ばかりしてるが、

将来は爆撃機も偵察もすべて一機種で賄える日が来る。
オレはそう確信してる。
そのためには戦闘機を今のウチに手に入れ、海軍の中枢に育てるべきだと思うのだ。」

「フム・・。凄い考えだが・・。
確かに飛行機の性能向上は凄いと思う。
フワフワと飛ぶだけだった飛行機が、
ここまで性能が上がるとはライト兄弟も予想してなかったろう。
先の大戦では完全に戦争の末路も決めたしな。」

「それにだ。
今は馬力が無くて頼りないかも知れぬが、
戦闘機のパワーが上がれば手の届かない超高空にも駆け上がれる。
速度も上がる。
パワーがあれば出来ない事は無くなるぞ。
パワーがあれば燃料も多く搭載出来るから、航続距離も伸ばせる。
そして、爆撃にも重い爆弾を抱えられる。
戦闘機だから爆弾を捨てたら敵機にも歯向かえれる。
爆撃機では出来ない芸当だぞ。
これなら護衛ナシでも敵陣深く侵入可能になると思わないか?」

「凄い。
確かに馬力が上がれば重い爆弾も抱えられるし、高い空も飛べる。
何よりも速度も上がるな。」

「柴田、オレと一緒に航空隊の未来を開発しようぜ。」

「G田、オレも戦闘機に乗るぞ。」

若い彼等が熱い話をしてるのを影から高野五十六が覗いてたのを彼等は知らない。

「フフフフ。素晴らしい話だ。
確かに馬力が上がればあの頼りない飛行機も活用可能となるな・・・。
帰国したら彼等を早速航空の道へ引き入れないと・・・。」

G田となった田中は柴田との交遊の道を得て、
未来の険悪な関係とは途絶する事になった。

（ヨッシャ！！
これで坂井センセや未来の部下から顰蹙買わずに済むぞ。
零戦も絶対に馬力中心で活用させないとな。
オレの持つ未来の戦闘機のデザインも各航空機会社に渡さないと・・・！）

G田実となった田中実は心で未来の海軍航空隊を画いてた。

オレはGだ。（後書き）

本作の主人公は後年、嫌われたりルメイを表彰したりG田艦隊と陰口を
叩かれたアノ人ではありません。

多分・・・。

後年、某エースから嫌われたり、
戦闘機無用論を提唱した人物とは一切関わりはありません。

多分・・・。

なをこの作品は完全に趣味に走りますので、実在の兵器や歴史とは
全くリンクしません。
山本五十六も高野五十六として旧姓で出します。

今日も飛ぶ飛ぶぅぅ。（前書き）

いよいよ霞ヶ浦です。

今日も飛ぶ飛ぶぅぅ。

命惜しまぬ予科練のぉぉ、ななつボタンは桜に錨。
今日も飛ぶ飛ぶぅぅぅ・・。

やぁ、オレはG田となった元、太田実だ。

柴田と共に、いよいよ霞ヶ浦で航空実習を受ける事になった。
余談だが、兵学校出身の教官と兵上がりの下士官では呼び方が違うのだ。
士官は教官、下士官だと助教と言う具合にな。
テクニックは間違いなく下士官が良いのに何故??
オレが海軍を仕切れる立場になったら、絶対にこの制度は変える。
学校を出たばかりのオレ達みたいなボンボンが
歴戦のパイロットを率いるなんて冗談では無い。

「柴田、今のパイロットの育成制度をどう思う?」

「ン??どうって???」

「おかしいと思わないか?
まだ素人のオレ達が分隊士とか呼ばれ、歴戦のパイロットである下士官搭乗員を
アゴでコキ使ってる状況だよ。」

「確かにな。
オレ達みたいな素人が歴戦のパイロットを使えるのもおかしい。

どうなってるのだ??」

「恐らく古くからの悪いしきたりが今も続いてるのだろう。
特にパイロットでは絶対に修正すべき制度だ。」

「そうだな。歴戦のパイロットをムダに死なすかも知れないしな。」

「ウム。そのためにもオレ達だけでも彼等の信頼を得ておくべきだ。」

「ああ、未来の部下でもあるしね。」

士官待機室でオレ達は話し合ってたが、オレ達の話を他の士官は全く聞いていなかった。
そして三式初歩練習機の前部シートに座り、後席の助教の下士官パイロットから指導を受けてた。

「G田少尉、宜しくお願いします。
黒岩一空曹と申します。」

古参パイロットの黒岩紀雄がオレの指導教官だった。

「黒岩一空曹、G田少尉です。宜しくご指導お願いします。」

「し、少尉・・。私如きに丁寧な挨拶なと不要ですよ。」

「とんでもない事です。
空を飛ぶ事に関しては私はド素人。
プロの貴方に教わるのですから、キチンと挨拶だけでもしておくのは当然でしょう。」

黒岩はビックリしてた。
大半の・・と言うか、
士官候補生の連中は下士官には呼び捨てで、どこのバカ殿かよ？と
言いたくなる連中ばかり。
逆らっても彼等の方が階級も上。
間違っても彼等を批判すれば昇任も阻害されてしまうのである。
飛行時間が既に二千時間を越えてる黒岩にしても同じであった。
それなのにこのG田と言う少尉は・・・。
下士官の自分にキチンと挨拶やお礼を言う。
コレが兵士なら当然なのだが、仮にも士官だ。
未熟でも士官。
その士官から挨拶を受けるとは・・。
黒岩は感動してた。

「G田少尉、ありがとうございます。この黒岩、G田少尉のためにも誠心誠意を持ち、
持てる技術はすべてお伝え致します。」

「黒岩一空曹、宜しくお願いします。
それと訓練が終わった後で構いません。
滑走路脇で助教の皆様を集めて頂けませんか？」

黒岩はそら来たと思った。
我々を修正する気だろう。
だが来いと言われたら例え親の葬式でも集まらないといけないのが
軍隊だ。

「分かりました。１７００以後なら大丈夫です。
全助教を集めておきます。」

「緊張しなくても大丈夫ですよ。
親交を深めたいだけですので。それと色々と飛行機について教わりたいと思ってるのです。
酒補や隊内だと色々と言われると思いましたので。」

修正（バッターやアゴ）を覚悟してた黒岩だったが、G田の話にはビックリさせられてた。
親睦を深めたいだけ??
今までの士官候補生だと、我々を見かけたらバカにするか、殴るだけ。
それが・・。

「G田少尉、全パイロット（下士官兵）を集めておきます。
我々の持てる知識や技術はすべて話します。
宜しくお願いします。」

「コチラこそ・・。
そろそろ発進しないと・・・。」

「オッ、後がつかえてますね。では、富士山、筑波山八の字飛行発進。
私が最初は操縦しますので、手足は離しててください。」

「了解です。黒岩一空曹。」

やがて三式初歩練習機はスルスルと滑走を始め、フワリと霞ヶ浦の空に舞い上がった。

（柴田も同じ事を頼んでるだろうな・・・。）

G田は僅かずつでも下士官兵と交流を持ち、
彼等の親交を得て後の海軍航空隊の要とするつもりだったのだ。
パイロットの大半は下士官なのだからな。

G田と柴田は共に下士官との交流を持ち、一日でも早く技術の習得。
そして海軍航空隊の発展を進捗するのだ。

今日も飛ぶ飛ぶぅぅ。（後書き）

ようやく霞ヶ浦です。

霞ヶ浦（前書き）

まだ訓練途上です。

霞ヶ浦

もう田中です・・とは言わなくても良いでしょう。
G田です。
現在、霞ヶ浦の滑走路外柵近辺で下士官との親交を深めております。
いや、歴戦の搭乗員の方の目って恐いですね。
階級と言う傘が無かったらとても対等には話せないと思います。

「皆さん、こんばんわ。
今度、この霞ヶ浦で初歩訓練を受ける事になりました、G田少尉です。
コチラは同期の柴田武雄少尉です。宜しくお願いします。」

「柴田少尉です。空を飛ぶ事に関しては皆様に教わるしか無い人間です。
宜しくお願いします。
それと・・。
コレはホンのお近づきの印です。良かったら皆さんで分けてください。」

オレと柴田は持参した袋を彼等に手渡した。
中身は高級タバコのホマレだ。
酒でも持ち込もうと思ったが、まだ巡検前。
休みならともかく平日にはマズイと思い、タバコを二人で金を出し合い、彼等に
プレゼントしたのだ。
ワイロとは違うからね。

「G田少尉、柴田少尉、頂いても宜しいのですか？
こんな高級タバコを??」

「モチロンです。皆様に今後は指導して貰うのですから。」

そう言うと彼等はワイワイ言いながらホマレを分け合いスパスパと吸い始めた。

そして黒岩一空曹が先陣を切り我々に挨拶を始めた。

「G田少尉、柴田少尉。先任搭乗員を勤めております黒岩です。
お二人の指導は我々が責任を持ち、初歩からキチンと指導致します。
」

「黒岩さん、宜しく頼みます。他の皆様も訓練では遠慮無くシゴいてください。
さすがに外部の目がありますので、飛行中のみにお願いしますけど。
」

そう言うと彼等はワハハハハと笑い、「承知しました。」と応えてくれた。
そして彼等の実戦の話なども聞くと・・・。
まだ、大戦に出たパイロットは数が殆ど居なく、唯一、上海方面で独逸と戦ったのが、
黒岩だそうだ。
ドイツのアルバトロスは中々手強かったとか・・・。

「フム・・・。やはり実際に戦った方の話は違いますね。
所で皆様にお聞きしたいのですが、将来の我が海軍航空隊には、今のパイロット育成制度で

間に合うと思いますか？」

彼等はガヤガヤと話し合ってたが・・・。

「G田少尉、コレは内密（オフレコ）でお願い出来るなら話しますが。」

黒岩が代表で自分に話しかけて来たのだ。

「モチロンです。オレと柴田だけの心にとどめておきます。」

「それならお話します。
自分は先の大戦で撃墜したドイツのパイロットと話し合いをした経験があります。」

「ほお、興味深いですね・・・。」

「ハイ。現在、世界の戦闘機はドイツ、アメリカ、イギリス、フランスがトップクラスです。
特にドイツは敗れたとは言え、素晴らしい新鋭機を続々と出しました。
東洋では殆ど戦果も無かったドイツですが、欧州では凄い活躍をしています。
特に赤男爵（レッドバロン）と呼ばれた英雄も出てますからね。」

赤男爵（レッドバロン）＞某二輪屋ではありません。＞は本名、リヒトフォーヘンと呼ばれる先の大戦最大の英雄だ。
８０機以上の撃墜数を誇るエースと呼ばれる英雄だった。
残念な事に大戦末期に戦死してしまったが。

「その彼等と色々と会話して分かったのですが、ドイツでは敗戦さ

え無かったら、
次の世代の戦闘機の開発も出来てただろうとの事です。」

「次の世代の戦闘機？？」

「ハイ。翼は低翼単翼。ひたすらパワーを求め高い空を飛べる戦闘爆撃機と呼ばれる機種を開発してたらしいです。」

「興味深い話ですね。」

「そんな飛行機で戦闘任務が出来るのか？と聞くと、彼等はパワーさえあれば可能と断言していました。今の戦闘は二十年以内には滅びると予言もしてました。」

フム・・。
オレの計画とも一致する予言だな。
まさかドイツにもオレみたいな転生者が居るのか？
いや、居ると思う方が良い。
何事も想定しておかないと某原発騒ぎみたいな事態が起きたらフリーズしてまうぞ。
特にオレ達は軍隊だ。
常に最悪の事態を想定しておくべき。
備えあれば憂いナシと言うでは無いか。

その後彼等と色々と懇談し、今すぐは不可能だが、出来る限り下士官の優れたパイロットの昇進を早める制度を上層部に具申すると約束した。
こんな凄腕パイロットが居るのに、素人士官に一番機を任せてた海

軍・・・。
いや・・・。

日本軍は頭が狂ってたとしか表現が出来ないぞ。
絶対に腕＝階級にしないとね。
腕のあるパイロットが指揮したら、負け戦でも退却が可能となる。
勝てる戦も確実性が増す。
そのためにもオレ達が努力して、彼等を昇進させないとね。

その後、滑走路脇での懇談会はオレ達二人が終業するまで続けられた。
そして彼等とは部隊が違っても話し合う機会を持ててた。
何とか一日でも早く具申できる階級にならないとね。

霞ヶ浦（後書き）

G田とは違う生き様となるG田です。
下士官パイロット軽視は日本海軍最大の愚行でした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9303y/

Ｇ田海軍航空隊

2011年11月28日04時54分発行